

特集 リスクコミュニケーションの新しい試みをご紹介します

リスク評価と並ぶ食品安全委員会の重要な役割として、消費者をはじめとする関係者の皆さんと相互に情報や意見を交換するリスクコミュニケーションがあります。食品安全委員会では、よりわかりやすく、より参加型のリスクコミュニケーションを実現するために、従来のやり方の改善や新しい試みに取り組んでいます。

意見交換会の新しい試み

従来、意見交換会は、テーマに沿って(1) 科学者などからの基調講演、(2) 科学者など関係者によるパネルディスカッション、(3) 会場参加者との意見交換というやり方が定番でした。しかし、このやり方では参加者が本当に聞きたいことに十分に答えられているか課題がありました。

そこで平成20年11月18日(火)、「こんなこと聞いてみたかった、農薬のこと」と題して、「疑問点から出発する意見交換会」をはじめました。

事前に食品安全委員会のホームページなどを通じていただいたご質問やご意見、これまでの意見交換会や食の安全ダイヤル、食品安全モニターの方々からの報告などをもとに、疑問点を九つにまとめました(図表1)。当日は関係するパネリストが回答し、さらに質問や意見を交換して

いくやり方で進められました。『消費者参加』を主眼とした新しいやり方です。

また、この意見交換会は、食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省、全国消費者団体連絡会が共催で行い、消費者の方々に企画段階からかかわってもらったこと、リスク評価からリスク管理まで様々な疑問について横断的に意見交換ができる体制を整えたことも特徴です。

アンケート結果から見ると、8割弱の方が「わかりやすかった」と答える反面、農薬への疑問が「解消された」方は約6割にとどまりました(図表2)。議論の深め方などに課題が残った面もありますが、この結果を参考に、さらに参加される方々のニーズを分析して目的を明確にし、形式にとらわれないやり方を試みていきたいと考えています。

※この意見交換会の詳しい内容は、

<http://www.fsc.go.jp/koukan/risk-tokyo201118/risk-tokyo201118.html>

意見交換会の
ファシリテーター(進行役)を務めて



全国消費者団体
連絡会事務局長
阿南 久氏

11月18日の意見交換会は、消費者の参加が少なかったのは残念ですが、消費者団体からは良い評価をいただきました。論点を明確にしたこと、わかってもらえる言葉使いや資料づくりなどに努力した成果でしょう。

もっと多くの一般消費者に参加いただくこと、会場発言の受け方など、課題はまだありますが、今後の良いモデルになったと思います。

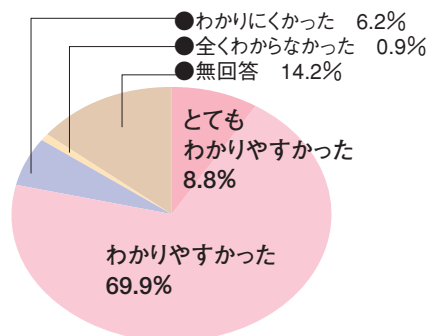
今回の組み立てや資料が、各地で活用されていくことを願っています。

図表1 「こんなこと聞いてみたかった、農薬のこと(11月18日開催)」で事前にまとめた疑問点

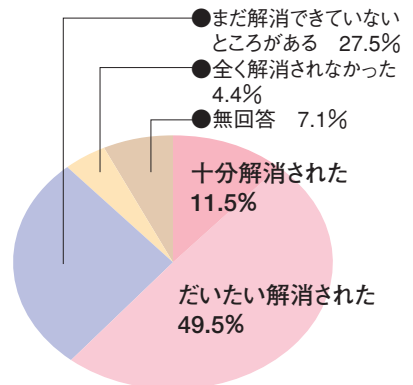
- 1 どうして農薬が必要なのか?
- 2 農薬の安全性はどのようにして確保されているのか?
- 3 食品の基準値はどうやって決めているのか?
- 4 ふつうの食事から、どのくらいの量の農薬を食べているのか?
- 5 農薬を使う時の基準はどうなっているのか?
- 6 生産農家の方は農薬を使用する時、どんなことに気を付けているのか?
- 7 海外では日本で使用されていない農薬が使われているようだけど、そんな農薬が使われた作物を食べても大丈夫なのか?
- 8 残留基準をオーバーしていたということが、マスコミで報道されることがあるけど、行政の監視はどのようにになっているのか?
- 9 残留基準値を超えたものは、危険なのか?

図表2 11月18日の参加者アンケート結果(回答113名)

1 パネルディスカッションでの議論



2 農薬についての疑問は解消されましたか?



3 形式に関する自由記述意見

- 消費者の知りたい疑問から入って、関係者が役割分担して説明する方式は良かった
- 会場でいろいろ質問を聞いて答えるよりもずっとよかった
- 質問に対する説明・報告という形で進めるのであれば、より募集方法や内容を分けた方が対象がまとまり、ディスカッション等が有意義になったのではないかと
- パネルディスカッションを最低1テーマぐらいはやって欲しかった
- 本日の意見は基本的情報にとどまっているので、さらに深く詳細な議論ができる場を設けて欲しい

サイエンスカフェの開催

サイエンスカフェとは、一般に「喫茶店などで飲み物を片手に、市民と科学者が科学について気軽に語り合う場」のことです。食品安全委員会でもこのやり方を取り入れ、平成21年1月20日(火)に東京・銀座で、コーディネーター隈本邦彦江戸川大学教授、スピーカー小泉直子食品安全委員会委員長代理による「“安全な食べもの”って何だろう?～健康を守るからだのしくみ～」と題したサイエンスカフェを開催しました。

幅広い方々に参加してもらえよう新聞での告知やチラシの配布を行い、26名の参加を得て予定時間をオーバーした活発なやりとりとなりました。事後アンケートでも「わかりやすかった」「楽しかった」との声が大半となる有意義な場となりました。今後、このような参加者の方々の疑問に直接お答えする小規模なリスクコミュニケーションも積極的に行っていきたいと考えています。

※サイエンスカフェの内容については、P8「委員の視点」をご参照ください。

目的に応じた育成講座の開催

全国津々浦々でリスクコミュニケーションを推進していくためには、それぞれの地域でリスクコミュニケーションの担い手となっていただく人材が必要です。そこで食品安全委員会では、地方公共団体と共催し、全国各地で食品の安全性に関する人材育成講座を開催しています。

募集対象は講座によって異なりますが(図表3)、食の安全に関心をお持ちの方や食の安全について会合で話をする機会のある方などを中心として、積極的に参加いただいています。



サイエンスカフェの様子

《リスクコミュニケーター育成講座》

◎ファシリテーター型

地域において消費者、生産者、事業者などの食品関係者の立場や主張を理解し、意見や論点を明確にして、相互の意思の疎通をスムーズにする役割を担う方を育成するためのファシリテーション(※)に関する基礎講座です。受講者には、県や市区町村が開催する意見交換会などにおいて進行役を務め、円滑に議論を進めていただくことを期待しています。

※ファシリテーション:「促進すること」「容易にすること」。会議等で参加者の意見を引き出して活発な意見交換に導き、コミュニケーションを活性化させて成果に結びつける支援をすることを意味しています。

◎インタープリター型

食品に関する科学的な知識をお持ちの方を対象に、食品安全委員会のリスク評価結果の概要や関連知識を知っていただくとともに、コミュニケーションスキルの基礎を身につけていただくことを目的とした講座です。受講後はこれらの知識を地域の方々に伝えていただくとともに、そこで得られた意見などを委員会にフィードバックしていただくことを期待しています。

※詳細は、P6インフォメーションをご参照ください。

図表 3 各講座の募集対象者

どの講座も講座開催地(県・都市または地方ブロック単位)にお住まい、またはお勤めの方で以下のいずれかの条件を満たす方が募集対象となります。

《リスクコミュニケーター育成講座》

◎ファシリテーター型

- (1) 食品安全委員会が平成18～20年度に実施した「食品の安全性に関する地域の指導者育成講座」を受講された方
- (2) 食の安全に関する都道府県等が実施する講座を受講した経験のある方
- (3) 食の安全に関するリスクコミュニケーション業務に従事した経験のある方
- (4) 地域の集会等において食の安全について講演した経験のある方

※食品安全モニターも募集対象に含まれます。

◎インタープリター型

- (1) 食品安全委員会が平成18～20年度に実施した「食品の安全性に関する地域の指導者育成講座」を受講された方
- (2) 食品安全委員会が実施するリスクコミュニケーター(ファシリテーター型)育成講座を受講された方
- (3) 食品安全モニター (4) 食品安全行政の従事経験者 (5) 地方公共団体主催の「食の安全関連講座」の受講者
- (6) 食品および食関連事業の事業者・現場従事者
(例:食品関連企業関係者、製造者、生産者、販売者、料理学校講師、栄養士免許取得者、食育担当教師など)
- (7) ジャーナリスト(新聞記者、雑誌記者を含む) (8) 学校の教師 (9) 大学生・大学院生 (10) 食関連のNGO/NPOメンバー



リスクコミュニケーター育成講座の様子